

第百六十三話 軍人らしからざる者こそ！

小生の年の離れた従兄は、陸軍中野学校出身者であり、小生学生時代には、彼の息子（防大の後輩）と一緒に興味そそられる話を聞いたものである。同校は、中野学校の前身を含めても、7年という短期の存続であったが、その卒業生の果たした功績は至当に評価されてよい。

1 陸軍中野学校の概要

岩畔豪雄中佐の献言で、「防諜研究所」が設立されたのが、1938（S13）年3月である。「後方勤務要員養成所」を経て、1940（S15）年に「陸軍中野学校」と改名された。



当初は、九段の愛国婦人会本部の別棟の仮校舎であったが、翌1939（S14）年4月中野区囲町（現東京警察病院敷地）に移転、空襲の激化に伴い群馬の富岡（現富岡高校）に移転した。1944（S19）年8月には静岡の二俣に分校を設立し、遊撃戦要員教育を行った。

二俣分校を含む卒業生総数は2500名余（異説あり）である。学生は、陸士卒、予備士卒、教導学校卒から選抜された。東京帝大を含む有名大学出身者が多かった。軍人らしからぬ点が、進展性と適性ありと評価されたのであろう。

参謀本部の直轄であり、創立当初の目的は、長期外国滞在型の忍者・御庭番的な要員、交替しない駐在武官として総合的な情報要員育成であったが、戦局の悪化により、特務機関員へそして遊撃要員へと変容していった。教官としては、参謀本部の中堅将校等が派遣された。

2 特色等

- （1）創立目的もあり、その存在も教育内容も秘密性・秘匿性が非常に高かったが、戸籍抹消云々は所謂都市伝説のようである。唯、偽名の使用は日常的であった。
- （2）平服、長髪が推奨され、タブーなく自由に議論する校風、飽くまでも生きて任務遂行する至誠の涵養、校外の実習もあり、幅広い教育が行われた。

3 卒業生の動向・活躍等

- （1）大陸方面、南方方面での勤務の他、参謀本部等で勤務した。特務機関の一員として活動した者も多い。彼等は、機関長から重宝されていた。中野戦士への需要が非常に高まり、人事担当者が苦勞したとも。沖縄戦に参加した中野学校出身者も居る。
- （2）自らの視察等による兵要地誌や関連情報の入手のほか、女スパイ、売春婦や情報提供者を多数組織化、運用し、所望の情報入手に努力、相応の成果を上げた。最も相手側も同様の罫を仕掛けてきたのは当然で、虚々実々の暗闘が繰り広げられた。戦後、ソ連や連合国側も中野学校の動向に留意し、参考にした。
- （3）便衣スパイとして行動した者も居り、一匹狼的な行動が多かった。
- （4）敵に捕らわれることは工作員の宿命であり、露見し殺害された者も多い。彼等が如何なる成果を上げたかは詳らかにはなっていないが、これも秘密情報員の宿命か。
- （5）ルバング島の小野田寛郎少尉、GHQに潜入工作した田中徹雄大尉の他、東南アジアの独立戦争に携わった卒業生も多数居た。至誠の人、信念の人が中野学校出身者だ。

4 中野学校の現代的意味

- （1）思想戦、宣伝戦は平時における重要な戦いであり、日本には中野学校的な総合的情報将校育成機関が存在しないが、果たして現状で良いのか検討すべきであろう。
- （2）謀略、諜報、スパイ等、現代の日本人は嫌悪感を有しているが、列国の現状から、果たしてそんな綺麗事で済まされるものだろうか。意識・認識改革が必要だ。
- （3）情報要員の育成には時間と金がかかる。長期的視点と視野で育成すべきである。

* 我が国はより『情報』に意を用いるべきだろう。

（第百六十三話 了）